
電車内は人の心の中

小田 浩正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電車内は人の心の中

【Zコード】

Z8824Z

【作者名】

小田 浩正

【あらすじ】

僕は下校での電車内では、立たずに必ず座るようにしている。そして、目を閉じて音楽プレイヤーでクラシックを聴く。だが、目を開けたら……

だらだら続けるつもりです。コメディーだったり、ファンタジーになってしまう作品です。毎回1000文字程度を目安として書いているので、気楽にどうぞ？

あと、『神様がここにいる』もよろしくお願ひします。

最初に（前書き）

最初に「」説明から

それと、8章目から読んで欲しいラノベの話が始めました。

どうぞ、見てください。

最初に

僕にはある秘密を持つている。

といつよりは、ある秘密を知っていると言つた方が妥当だろつ。

僕はある時間のある列車のある席に座る。

そして、僕の向かい側の席に誰かしら座らなければ、秘密の効果は見せることが出来ない。

まあ、見せれるかは別だが……。

どうしてこうなつてしまつたのか知らない。

それは、ある日突然起きた。

その起きたことを最初、どう対処していいのか、わからなかつた。

しかし、今ではこんなことが起きても対処は楽々なのです。

『こんなこと』を今は説明できない。

それを説明をしても、理解できないだろつと愚つから。

だから、1回僕は過去の起きたことから説明していくつと愚つ。

過去と言つても、1週間ぐらい前にしか戻らないが。

では、始めましょう。

ど、ついで、『電車内』へ……。

最初に（後書き）

これから始まります。
よろしくお願いします。

第1話 プロローグ（前書き）

初めて書きました。

出来はわかりません。

見た方はなるべく感想よろしくお願ひします。

第1話 プロローグ

僕は電車内にいた。

なぜなら下校中だからだ。

僕の通つている学校では、 線の始発駅が1番の最寄駅となるため、 学校が終わつて電車内に入れば、 席が空いていることが多い。

だから僕はドアの近くの席に座つた。

さて、 僕はこれから電車内で約20分間過いじをなければならない。

することができない。

本を読めばいいのではないかと思うかもしれないが、 文庫のあの厚さを見てしまつと気が引けてしまつ。

小学生のころは、 教科書に書かれた詩を見るだけで、 吐き気がした。

マンガでもいいのではないかと思うかもしれないが、 僕はマンガを読まない主義。

だから、 無理。 いや、 別に読もつと思えば読める。

だが読まない。

しかし、 そんな僕でも高校生になれば、 中学生の『矛盾』ぐらには読めてしまつ。

…そんな冗漫話は置こといい。

… しうがないので、僕はポケットからたつた一人のアーティストしか入っていない音楽プレイヤーを取りだし、耳をイヤホンに装着。

曲はベートーベンで「悲愴」

何と云つても、今の僕に合つてしまふ曲である。

…自分でもしう思つてしまふのはなんだが、そうなのだ。

演奏時間は約20分なのでしうどいに配分だ。

目を開じる。さて、鑑賞にでも漫る。

「…ふう…ふう…ふう…

「…?」

「……」

なぜか、バスドラムをたたく音とともに変な音が聞こえる。

聞き間違ったようだ。

目を開けて、周りを確認。

まばらに人はいるが、特に気になることは見つからなかつた。

もつ一度田を覗いて、田の鑑賞に没まい。

さて、もうそろそろ一つ目の駅にたどり着くだらう。

始発駅から自分の家の最寄駅の間に駅が2つあるが、いつも乗り込んでくる人は少ない。

なくともいいのではないかと思うのだが、朝は案外乗り込んで来て登校中、押しつぶされる。

ところでは、必要なのである…。朝限定。

そして、僕はいつも暇なので僕が乗っている列車で、誰がどこで、アから入ってくるのか、統計をしている。

僕はなるべくいつも同じ時間の列車に乘ろうとしている。

大抵、この時間に乗り込んでくるのは買い物帰りのおばさんだけだ。

腰が曲がり、持ち歩いているのをああちやんが大変そうに見えて、手伝おうか迷いつゝもあるが、なるべく気にしないようにしている。

「次は駅です」

かすかに耳に入つた、アナウンスで僕は行動に移る。

さて、かばんの中からノートを取り出す。目を開けないで。

表紙には、『DATA NOTE』と書かれている。

決して『DEATH NOTE』ではない。

そこは強調しどきたい。

まあ黒いけど…。

さて、最後の方からページをめくる。

もつもつもつもつ、ノートも終わりそうだ。

結構書いた方だ。なかなか僕もやつたものだ。楽しいものではないのに。

そして、電車が減速し、停まった。

ドアが開く音がしたので、田を開ける。

「……？」

前を向いたら、そこはまるで別の世界だった。

……なんひとつはない。

前を向いたら、そこにいたのは女だった。

別に女が前にいてもおかしくはない。

女の行動を見て僕は、口を開けざる負えなかつた。

「 …ふつ…ふつ…ふつ…」

なぜなら、女は……

僕の前で筋トレをしていたから。

そして、どうしようつか?

第1話 プロローグ（後書き）

暇があれば、続きを書いてこきます。

初めて書いたので、出来はわかりません。
見た方はなるべくご感想よろしくお願いします。

第1話 第1章 もと、むづかるか？（前書き）

だらだら書いていきます。

ご感想よろしくお願ひします。

第1話 第1章 さて、どうするか？

さて、どうしようか？

僕の目の前では、女が筋トレをしている。

まず、状況を説明しよう。

駅に着いた時、僕は目を開けて前にいる女に気付く。

女は自分の通っている高校の制服を着ている。

僕は、高校1年生のため、同級生もしくは上級生となるだろう。

顔はまあずば抜けてではないが、綺麗な人の分類に入るであろうことが予測できる。

あごはシャープ。ほんのり赤い唇。黒の長髪。目はパッチリ。長いまつ毛。高い鼻。

そんな女がなぜ僕の前で、筋トレしているんだろうか？

聞いてみていいのか？　はたまた、無視した方がいいのか？

周りを見回す。

乗り込む人は今日は誰もいないまま走り出す。

横には、僕と同類のような学生がいる。

斜め前には、疲れきっているのかサラリーマンが先ほどから寝ている。

遠くの方を眺めると女子高生2人組が、何か喋っている。

ドアあたりで、塾に通うためなのか大きいバッグを持って、立っている。

そして、前にいる女子。

注目すべきは、この人物。

今までにいない希少価値のある人物だ。

僕は筋トレをあまりしたことがないため、名前など知らない。

だから、彼女の行っていることが言葉でしか説明できない。

彼女は、屈伸のような動作を一定のリズムで行っている。

準備体操のような足を伸ばしているときに、体を前に向けるのではなく、地面と垂直になるように体が動いていない。

手は、頭の後ろで組んでいる。

足の方は見えそうで見えない。なんか、悔しい。

ハツ！

もしかして……。

そこで僕は気がつく。

僕はなんて愚かなことをしてしまったんだ。

なぜなら、僕が彼女を見ていたところでは、彼女も僕を見ることができる。

僕の行動を見てもおかしくはない。

まず僕は、顔をガン見していた。

そのころ僕は、そこそこきれいな人だなあとが完全に上の空になってしまっていた。

何と言う失態。

僕は自分の顔がみるみる赤くなっていくのを感じた。

相手が気付いているのか、一応確認のために彼女の方を向く。

いまだに彼女は筋トレ中。

気付いているのだろうか？

何一つ気にしていないそぶりで続いている。

これなら安心かと思った。

だが、顔の表情がどうなつてゐるか分からぬ。

怒つてゐるのかもしね。

睨んでゐるのかもしね。

女王様的な微笑みをしてゐるかもしね。

顔を確認したいのだが、なかなか見ることができない。

彼女がしゃがんでゐるときは、ちよつと顔線が同じぐらくなつた
めに見られない。

そして、立つてゐるとときは、上から見下すかのよつた態度をみせて
いるのかもしね。

そんな顔されているにもかかわらず顔見てしまつたら、どう受け捉
えられるかわかつたもんじやない。

どうすればいいんだらうか？

第1話 第2章 ぬこ川魚との出合(前書き)

おつきりしてこつてください。

ご感想待っています。

第1話 第2章 白石三角との出会い

どうすればいいんだ？

僕は彼女の方を向かない。

だったら、僕は田を下に向ける。

まだ膝元に開いていたノートに書かれた数字を見る。

自分でもこの膨大な数字を見ると、吐き気がしてくる。

だが、この程度では時間は進んでくれない。

うん？

そういうえば、今も彼女がこちらを見ていたら、僕の行動を見られていることになる。

ところことは、全部筒抜けとなつていることだ。

今までの行動が全て見られてたとしたら？

なんか、全てをさらけ出しているかのようで恥ずかしい。

いつなつたら、我慢でしかない。

田を閉じる。

イヤホンからは、『悲壯』の終盤に突入していた。

だから僕は、外など気にせずに耳に傾けた。

……

『次は×××。××駅で×す。』

2つ目の駅の名がアナウンスにながれた。

僕は祈っていた。

彼女がこの駅で降りてくれることに。

まあ無理だったが。

細く目を開けて確認したが、まだ僕の目の前にはいた。

「ふう……」

しかし彼女は、筋トレをやめていた。

軽く息を整えている。

タオルで汗をぬぐう作業もしていた。

夏も過ぎて、秋になりかけているためだいぶ涼しくはなった。

だが、結構な量の筋トレをしていれば、汗は書いて当然だ。
しかし、なぜ制服でやっていたのだろうか？

ここで、好奇が訪れる。

彼女は、僕の目の前から移動した。

これで僕は救われると思った。

だが、彼女は向かい側に移動した。

そして今度は、つり革を使って、懸垂と言ったか（？）そんなことをし始めた。

上下に腕で体を持ち上げる。

足がついてしまうためなのか、曲げてやっている。

そこで僕は見てはいけない物を目にする。

彼女は気付いていないのか、スカートがめくれてきている。

だが、悔しいが、見えない。

ハツ！

僕は気付く。

また誘っているのか？

僕が痴漢的な行動をしていることを確認するために。

証拠が欲しいために。

しかし、そんな手にはのらないぞ。

僕はそこで、田を開いた。

次の駅は僕の最寄駅だ。

だから僕は脱出経路を考える。

こんな呪縛から解放されるために。

ドアに近い席に座っているために、他の誰よりも早くこの列車から出られる。

目を閉じてでも走り込めるのではないかと思つ。

『次は い。 駅で~す』

アナウンスもながれた。

だから、僕はバッグにノートをしまつ。

手にバッグを抱きしめて、準備万端となる。

そして、揺れがおさまる。

と「う」とは、電車が駅にたどり着いたことを意味する。

ドアの開く音がする。

いざ、参る！

だが、先ほどの2つの駅では乗り込んでくる人の数は少なかつたが、この駅はある程度大きい市にある。

だから、早い時間でも乗り込んでくる人はいる。

そこに気付けなかつた僕は、やつてしまつ。

ドアが開いて、僕は向かつたが激突してしまつた。

相手は買い物袋を持つたおばさん。

そして、おばさんは強かつた。

僕はずつしりとしたおばさんに跳ね返させられて、電車内に戻される。

僕は倒れこんでしまつた。

そこで僕は見る。

見てしまつた。

白い三角の物を。

第1話 第2章 由三郎との出会い（後書き）

「J感想よろしくお願ひします。

第1話 第3章 うん、困った（前書き）

長く見守ってください。

ご感想よろしくお願いします。

第1話 第3章 うん、困った

見てしまった。

白い三角の物を。

「大丈夫？」

上から声が聞こえた。

それはそうだ。

僕は今、倒れているから。

「ま、手をとつて」

手がこすりて伸びてくる。

僕は手をとつて立つた。

そして顔を見ると僕は慌てた。

さつきの筋トレ女子だったからだ。

「さつきのことだけど……」

さつきてまさか、僕があなたのことじつと見ていたことか？

謝らなければいけない

「スミマセンでしたー。」

「はい?」

僕に満面な笑顔で返答。

ま、まさか、謝りが足りないといふことか?

僕は土下座をして、

「ホント、スミマセンでしたー。」

「はい?」

ま、まだか? まだ足りないといふことか?

「ほんとーうひー。スミマセンでしたー。」

「えつと…何がですか?」

まだ、知らないふりをするんですか?

も、もう知らない!

「あなたの筋トレをじっと見ていたことです…」

これで僕はもう…

「ど、どういふことですか?」

うん？

「…あなたが僕の前で筋トレしていたことですが…」

まだ知らないふりをするんだろうか？

「あ、あのう…は、恥ずかしいので、一回降りましょ…う…」

なぜか、顔を赤くしながら先に電車を降りてしまう。

僕はドアが閉まる中、なんとかして足を出して閉まるのを防ぐ。

これがなかなか痛い。

さて、彼女は近くにあったベンチに座つて、手招きをする。

まだ、顔が赤い。

僕はそこに座つていいのだろうか？

「は、早く…座つてください…」

声がだんだん小さくなつていぐ。

僕はしぶしぶ、彼女の横に座る。

「…どこから話した方がいいのでしょうか？
だいぶ話がかみ合つていよいよですが？」

僕は先ほどから聞きたかったことを口にすることとした。

「…聞くのもなんですが、どうして筋トレなどを…」

「や」からかみ合つていませんね…」

どうことだ?

「人を間違えていないでしょか?」

「いえ、あなただったと思いませんが…」

本当にかみ合つていないようだ。

「僕はあなたが懸垂しているところを…」

「え、えいして…えいしてですか!」

「な、何ですか?」

彼女が言いたいことはどうことだ?

僕が幻想を見ていたことか?

彼女を不快にしてしまったのかもしれない。

顔を下に向けて、手を膝にあて、プルプルし始めた。

相当怒っているかもしれない。

“どうやって謝りつか。

僕の知っている謝り方で、土下座が一番かと思ったが、他に何かあるのだろうか？

空中で1回転して土下座をし、頭を下げる回数を素早く多くやるのはどうだろうか？

ネタになるだけか…。

そして、そんなことを考えていると彼女がこちらを見て言った。

「なんで、私が考えてたことが見えているんですかーー。」

「……はあ？」

僕は彼女の方を向いて驚きを口にしてしまった。

「なんでっ！ 私がしてみたいことをっ！ あなたが見えているんですかっ！」

うん、困ったね。

第1話 第3章 うん、困った（後書き）

「」感想よろしくお願ひします。

第1話 第4章 吹つ飛び方（前書き）

「じんじん書いていきます。」

「ご感想よろしくお願ひします。」

第1話 第4章 吹つ飛び方

「なんでもつ！ 私がしてみたいことをつ！ あなたが見えているんですかつ！」

うん、困つたね。

そんなこと言われても知るか！

「えつと……ビリーハー」とですか？」

なるべく、平静を保つたと思つ。

彼女は今にでも、爆発しそうなぐらいに真つ赤つかとなつてしまつてゐる。

応答が出来ない状態じゃないだろうか？

「……大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫じゃないです……」

それはそうだ。

「なにか、冷たいものでも持つてしまふか？」

「要りません……」

ならいいけど……けど。

僕は、それでも自販機でペットボトルでも買ひに」とした。

「どう見ても、湯気が出ている。

どうから見ても、大丈夫じゃない。

「お茶です」

「えつ。いらっしゃって言つたんですが」

「どう見ても大丈夫じゃなさそうでしたから」

まあ、原因は僕にあるだうなう。

「……一応、もうひとつを出す」

ふたを開けて、口元に運ぶ。

ひとつ、ひとつの動作が美しい。

すっかり見とれてしまつせど。

「……あのう、せっかくじつと私を見てこるのでしようか?」

「……いえ、別に見てなは」

「もう、別にいいです。なんか吹つ切れましたから」

吹つ切れたと言つた。

とこり」とせ、僕を地獄に引きずるようなことでも思つてたんじやないだろ？

「わざの話ですが、まとめた方がいいのではないかと思つたんです
が」

テキパキとするタイプの女子らしい。

クラス委員長的な存在なのかもしれない。

「僕もわざの話ですが、どこのからまとめればいいのかわからな
いんですが」

「私もわざの話です」

一区切りつけて

「ですが、このことの発端はあなたの誤解によつて引き起つた
ものだと思つのですが違いますか」

「どこの誤解があつたのでしょうか？」

いろいろな所に、誤解を生んで仕方ない会話をしていたと思つ。

今思えば、彼女は僕の謝りを不思議な顔で見ていたことに気がつく。

「ど」と言えど、最初からですね。私は見ていました。あなたが
ドアに向かつて盗人の「とく走り込むところを」

盗人と言われてしまつた。

まあ、そんな感じで走つていたのは覚えているが、盗人と言われなくてもいいのでは?

「走つて、僕は乗り込もうとしていたおばさんに激突したところをですか?」

「私は最初に『さつきの』ことと言つた覚えがあります」

「僕も覚えていますが……」

「たぶんそこが私たちの話がかみ合わなくなつてしまつたところだと思います」

まあ僕は電車内での彼女が奇怪な行動をしていたことだと、勘違いしたということだらう。

「私はあの時の言葉の意味は、『そんなに弾き飛ばされるなんて、すごいですね』と言いたかったのです」

何でそんなことを言おうとしていたんですか……。

「……それを言われたら、今度は違う意味で話が盛り上がりてしまつたでしょ?」

「たぶんそうでしょうね。私もなぜそんな言葉を言おうとしたのかわからないんですけど、とにかく凄かつたからでしょ?」

そんな吹つ飛び方をしていたのか、僕は……。

第1話 第4章 吹つ飛び方（後書き）

「感想よろしくお願ひします。」

あと、間違いなどあつたら、よろしくお願ひします。

第1話 第5章 彼女は……（前書き）

まだまだ頑張ります。

ご感想よろしくお願いします。

第1話 第5章 彼女は……

「いつたいどんな吹つ飛び方をしていたんだ？」

「まあそんない」とよりも。

「私がなぜ、筋トレしていくか見えていたのかですが……」

「彼女もそこが疑問らしい。」

「彼女は僕の田の前でやつた覚えがないらしい。」

「あなたは僕の田の前で、えつと……」
「こんな感じの」とを

「僕はベンチから立つて、彼女のしていたことを真似する。」

「名前がわからないから僕は、実践して見せる。」

「ちよ、ちよっとやめて。」
「こんな感じでそんないとしたら田立つだしね？」

「……いや、名前がわからないからやって見せたのに」

「まあこじんなどいじみでやるものがじゃない。」

「つこでに電車内でも。」

「それはスクワットってこうんだよ。つてなんで続いているんですね
かー。」

「いやあ、なんか意外とこれ、おもしろいなあつて」

「は、早く……やめて欲しいんだけど」

あまり体力のない僕でも、なんか遊び感覚でやるとおもしろい。

「それでなんですが、なぜ……私が」

「してみたい」と見えて「いるかつて」とですよね?」

彼女はまた、顔が赤くなる。

「あまり……大きな声で……言わないでください……」

「わかりましたから、怒らないでください」

きれいな顔がこいつなるとかわいいんだな。

「なに笑っているんですか!」

「まあまあ

ちゅうと怒らせてしまつたらしい。

「それでですが、早く解決しましょ!」

「……はい」

彼女もおとなしくなつたので、僕も彼女もベンチに座る。

「聞いていいのかわからないんですけど、『してみたい』と『つけて』」

彼女はまたも、赤くなつてこぐ。

しかし彼女はなんとか抑え込むように、背を丸めて、歯を食いしばつてゐる。

「言つたくなければ、このことほなしにしていいのですが……」

彼女がいやならば、強要などしなくてもいい。

「いや、私はこのことについて悩になつていいんです」

「何をですか？」

「なぜ見えてこゐのか。あなたが私の考えていたことを

「さつきから『考へていた』とか、『してみたいこと』ってなんなんですか？」

それを言つてもうわなことなんにも始まらない。

「それはですね……」

声が小さくなつてこぐ。

「わ……」

「はこ？」

「わ…」

「わ？」

「私、筋トレが大好きなんです！…」

彼女は筋肉ウーマンだつたらしい。

「まあそれはそうでしょうしね」

僕は電車内でいやといつぱり見せつけられた。

「バカにしているんですか？！」

「いえいえ」

だが、筋トレが好きならあの時はあなたがやつたんじゃないかな？

例えば、知らないうちに催眠術にかかっていたとか？

それとも、彼女がとにかくやりたくて仕方なかつたのを覚えてないとか？

「今、何か変なことを考えてますよね？」

「そんなことめつそうもない」

「怪しいですが……」

「それでですが、あなたが筋トレマニアだとわかりましたが

「無理やり話をそらしたね……」

「あなたはそこまで人に筋トレを見せつけたかったのですか？」

「そんなことはないっ！」

そもそもうか。

第1話 第5章 彼女は……（後書き）

「感想よろしくお願ひします。」

第1話 第6章 手の平を僕の頬に（前書き）

だいぶタイトルが凄いことになつてきました。

すみませんが、ご感想よろしくお願いします。

第1話 第6章 手の平を僕の頬に

それもそうか。

「じゃあ、なんでなんですか？」

「知るかっ！」

「まあ、怒りないでぐださい」

「そんな」と言われたくないつー

話が進まない。

「じゃあ、戻りますが……なんで電車内あんなことを？」

「女性にここまで迫る男は嫌われますよ？」

そんなことをこきなり言われると、心はずつしじ刺さる。

しかし僕はそんなことを気にしない。

「気にしないぞ。

僕は平静を保つて、

「……僕は」

「だいぶ、心に刺さったようですね。してやつたりいー

結構、軽い女なのか？

「べ、別に……気にしてないよっ！」

「あらあら、案外かわいいんですね」

女から、かわいいとか言われるのは、これまた心に刺さる。

「……で、早く答えてください」

「まあまあ、焦らないでください」

話の主導権を持つて行かれたような気がする。

これは困る」とだよな。

「これから話すことは、他の周りの人と言わないで欲しいんですけど。約束できますか？」

周りの人？

「周りの人とはどうこうことですか？」

「えつ？」

何で疑問形？

その反応は一番困る。

「どうしたらいいんだ？」

「だから、周りの人とは誰ですか？」

「ですから、' クラスメイト ' です！」

「クラスメイト？」

「あのう、僕はあなたがどのクラスの方なのか知らないのですが……」

「ええええええええええええつ！」

なんだその驚きは……。

彼女の方が目立つんじゃないかな？

「その叫びはいつたい？」

「あなたっ！ 半年間どう過ごしてきたのですかっ！」

「どうと言われても……」

なぜなら、知らないからだ。

知る由もないから。

「で、では……あなた。私の名前は知らないのですか？」

「知るわけがないじゃないですか？」

「えええええええええええええつー！」

またその驚きですか……。

いい加減あきるんですが。

「それで……どうごいことですか？」

全く理解できない。

知らないことを言えと言われても、困ってしまう。

知らないんだから、しょうがないではないか。

僕の頭には、カスカスな脳しかないんだから、覚えてこることなど少ない。

どつかで相手が見ていたとしても、僕は気付いていないことも多々あるかもしれないではないか。

さて、どうしようか。

そんなに叫ばれても、僕は対応しようとしても、出来ぬことはない。

まあ、一応考えてみよう。

冷静になつてみよう。

今の状況だと僕は、圧倒的不利に立たされている。

彼女は知っているようだ。

僕は知らないが。

ということは、僕は結構危ない状況に立たされているかもしない。

しかし、知らないのだから、聞くしか方法がない。

何をされてもおかしくはないだろう。

怒つて、殴りかかってくるかもしない。

筋トレをしているから、重たいのを放つてくるかもしない。

覚悟しなければ。

……ふう。

よし、なんでもここやつ！

「なぜ、顔にそこまで力を入れているのですか？」

「気にしないで欲しい」

「で、どうなんですか？」

「知らないから教えてグホッ！」

平手打ちが左から来た。

やっぱ、痛かつた。

一応倒れ伏すことはなかつたが、後ろに後退してしまつた。

「なんでも知らないんですかっ！ じんじ心治さんっ！」

なんで僕の名前を知つているんだ？

「私はっ！ あなたと同じクラスっ！ そのはらふみか園原文華ですっ！」

「……ごめん。覚えがない」

「なんですつてっ！」

彼女がこちらに向かつてきた。

そして……。

平手打ちが右からも來た。

第1話 第6章 手の平を僕の頬に（後書き）

読みづらいかな？

読みやすければ、このまま続けていきたいと思います。

ご感想よろしくお願ひします。

第1話 第7話 も見ても彼女は……（前書き）

だいぶ書くのが遅くなっています。

なぜなら、宿題に手をつけなければならぬからです。

嘘です。

学校から借りた、『境界線上のホリド』の4巻を読みながら

ないのです。

あの分厚さ。ラノベでは考えられない1000ページ。

学生である僕には手を出せない本なので、学校に無理やり頬んでしまいました。

「おこづかせ語もしてこあたこととゆこます。

ご感想よろしくお願ひします。

第1話 第7話 もう見ても彼女は……

平手打ちのせいで僕は、アーパーマのような顔になつてゐるだろう。

相当腫れでいると思つ。

僕は彼女をこれ以上怒らせることをしてはいけないと思つた。

なぜなら、彼女の顔は鬼同然で、口から火を吹いてもおかしくはない状態だったから。

「夏休みを間に挟んでいますが、もうほんとんど半年を過ぎましたも同然ですのにっ！」

いや、それは僕も同然だ。

半年過ぎにして、クラスの人の名前があいまいしか覚えてないことはあるかもしれない。

しかし、顔すら覚えてないなど僕も驚きだ。

「なんでだろうね？ 僕も驚いたよ」

「何でそこまで平然としてられるんですかっ！」

あれれ？

もつと怒らせてしまつたらしい。

「まあまあ、深呼吸をしまグホッ？」

今度は、腹に入った。

彼女のストレートを僕は避けることが出来なかつた。

見ることはできた。

だが、対応することはできなかつた。

鍛えてない体では、彼女のパンチには敵わなかつた。

僕は片足をついて、彼女の方を向く。

「あなた、人を侮辱するのがうまいようですね」

「……あ、ありがとうございます」

「礼だけは言えるのですね。そこは関心しますね」

感心されても僕は困るんだけど。

「殴ったおかげで、少し落ち着きました

殴るだけで、落ち着くならもつと殴って欲しいね。

いや、僕はマジではない。

僕にじゃない。

他の物にだよ。

話して落ち着かせるよりは楽だからね。

「それですが、始めますよ」

「……早くしてくださー」

だいぶ痛みがひいたので、ベンチに戻る。

彼女も横に座る。

「じゃあ始めますね。まあまでは、私の過去から話したいと思いま
す。

私は昔、他の人と比べて、背が小さく太ってました。」

小さい頃、太っていた人は僕の周りにもいる。

たぶん彼女もその一人だろう。

「昔と言つても、中学生ぐらいです」

「……？」

今、なんと？

「まあ驚くのも無理ないですよね」

となると、相当頑張ってダイエットしたことになる。

「どれほどやったのだろうか？」

「その頃の写真がこれです」

横を向くと彼女はバッグからケータイをとって、操作していた。
そして、じつじつと向ける。

「これを他の人に見せることで、改めて太らないことを誓つんです

僕はどう反応していいのかわからなかつた。

「これを見せて、もう恥ずかしくはなりません」

□から何か言葉を出そうとしても、思いつかない。

「そこまで驚かなくてもいいんですよ」

たぶん、彼女は僕の驚いている理由をわかつていない。

なぜなら……

「あの、……」

「はい、何でしょつか？」

「全く太っていないじゃんっ……」

第1話 第7話 もう見ても彼女は……（後書き）

「感想よろしくお願ひします。」

感想をくださった方々ありがとうございました。』

暇な時間を使って、これからも書いていきたいと思します。

第1話 第8章 僕はいったい？（前書き）

今日は「境界線上のホラ子」（ホラ子とはホライゾンのことです）も読み終わりこじらに手が回りました。

僕の通っている高校では、なぜかライトノベルの多い学校で最初、もづびっクリでした。

まあこれまでに読んだラノベの数は、この1年で増えてしまったのです。

まあ家にもだいぶあります、今回はその一つをご紹介したいと思います。

『さよならピアノソナタ』

この作品は、『神様のメモ帳』を書いた杉井光先生の作品の一つです。

もう完結をしており、1～4巻+1冊の5巻です。

ぜひ読んで欲しい作品ですね。というより、読んでね？

あと、僕が今もひつ書いている『神がここにいる』もよろしくお願いします。

第1話 第8章 僕はいったい？

「全く太ってないじゃんっ！…」

どう見ても、太っているとは言えない。

小太りと言つわけでもない。

「どいが太ってないといふのですか？」

「全体にホッソリしてるじゃないですか！」

その「真に写つてるのは、セーラー服を着た彼女だ。

顔的には、幼さが残つている。

頬は少しブリブリ感がある。

だが、これを太っているとは言い難い。

これで太っているとか言われたら、他の人たち可哀想じゃないか？

「この時、学校の身体調査で平均を上回ってしまったんですね……」

「……それで？」

「はい？」

「それでですか？」

「だからですね、私は普通の人より太ってたんですね！　なので、筋トレをするよ！」となつたのです

……別に見た田は普通なんだから、いいのでは？

女子の考え方を理解できない。

「それで今も筋トレですか……」

「その通りです。あの時のこと~~が~~が屈辱で2度と太らないことを誓つたのです」

しかし、彼女。

「なぜ、電車の中まで筋トレしたかったのかわかんないんだけど」

「……も、まあ～やりたくなつてしまつたからですね。

ち、違いますよ！　實際にはやつてないですから
やつてしませんよ？！」

「心の中で考えてたことは、変わりはないんですね？」

「え、ええ。最初は、普通に家に帰つたら向をじようか考えてただけなんですけど、急につり革を見たらやりたくなつてしまつてしまつ革を使つなんてねえ。

小さい頃、つかまつて遊びたいなあとか思つた」ともあつたが。

さすが「元」の歳になると、田舎っ子になるのは恥ずかしい。

それを僕は女性がしているところを田の前で見ると、ワニキーだつたのか？

「それでですが、先ほど言ったように家でも暇があれば、筋トレを欠かさずやるつもりしてますんで」

暇があればか……。

僕なんか、『寝る』だけだ。

寝るはとてもいいものだ。

まず学校では、今の時期ではまだ窓側が暑いので窓側から3～4列並べていで、昼間が最適。

帰つたら、テレビを見ながら寝転がる。

テレビは自分の部屋にあるため、ベッドで横になることが出来る。

そして知らないうちに睡魔が誘つて、そのまま眠る。

これが毎日の繰り返しだが、これだけで十分生きてこける気がする。

さすがに、食事や風呂も生活には必要だが……。

「筋トレはしないでも出来るので、人がいないなどキツイものではないですが、軽めのこともしたりするんですよ」

「……まあでも、筋トレマニアは本当にすごい。」

「……ねぐらこですね。私が話せるのは。ただ、電車に出来ないよなことを考えていたら……」

「誰かさんに知られているのですが……『じつこつ』とかわかつているんですか？」

「わかるわけがないじゃないですか。僕もこのうの初めてですか？」

「しかし、となると……私の考えではこうなりますね。」

「あなたには能力があるといつこと

「それしか考えられませんね」

「……能力？」

「はい。たぶんあなたは、『読心術』の能力を持つてますね」

第1話 第8章 僕はいったい？（後書き）

「感想よろしくお願ひします。

あと、これからも読んで欲しいラノベについて書いていきたいと思
います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8824z/>

電車内は人の心の中

2011年12月31日18時48分発行